

さざなみ

国語教室

さざなみ国語教室
 第484号 2022年7月25日
 発行者代表 吉永幸司
 連絡先 大津市柳川2-11-5
 TEL 077-522-1008
 発行所 滋賀児童文化協会
 NPO 現代の教育問題研究所

半世紀を越えて

中村 武史

化学会社を定年退職後、独立行政法人に嘱託職員として就職し、国の資金による委託研究の運営に携わっている者です。

吉永幸司先生との出会いは今から五十六年前、私が滋賀大学附属小学校の五年生の時でした。当時まだ二十歳代半ばの紅顔の美青年(?)でいらつしやつた吉永先生が附属小に赴任され、その後卒業までの二年間をクラス担任として先生にお世話になりました。

小学校で先生には色々な教科を覚えていただきましたが、やはり記憶に残っているのは国語の授業です。とにかく、よく作文を書か

されました！また、教材の文章をどのように読み取るのか、生徒の自由な意見を引き出しながら熱心に指導いただきました。

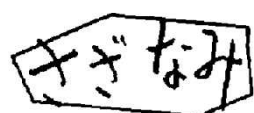
算数や理科には正解が一つしか存在しませんが、作文にはいくつもの正解があります。文章を繰り返し考え、自分の感性に最も合致した正解を探してゆく中で、やがて私はその正解を見つけ出す楽しさを感じるようになっていったように思います。ただ、読書感想文だけは嫌いでたまりませんでした。読書自体が億劫になってしまいうからです。現在の小学校では、読書感想文の指導は果たしてどのように行われているのでしょうか。

私は農学部に進み理系の道を歩きました。理系の間は、ともすれば国語を軽んじてしまいがちですが、社会に出てからは文章力の大切さを幾度となく実感させられました。実験に没頭している間は、ひたすら「もの」と「こと」を追求していれば済みます。しかし、研究テーマを提案し賛同を得ようとするとき、結果をまとめてアピールするとき、実用化を目指して商品設計をするときには、上司や同僚、お客様といった「人」に働きかけて協力を得なければ仕事はうまく進みません。

そして、第二のサラリーマン人生を送る現在の職場では、委託契約書や実施要領などの内容を事業者様に分かり易く説明しながら仕事を進めなければなりません。ここでも文章力が要求され、小学校で吉永先生に国語を教えていただいたことに感謝する次第です。

さて、六十五歳を過ぎますと急に高齢者扱いをされる一方で、時々シルバー割引の恩恵にも与かれるため悲喜こもごもといったところ。この先は、厚顔な爺さんだと言われないように、正しく美しい国語を使うように改めて努力してゆきたいと思っています。

(農研機構 生物系特定産業技術研究支援センター 職員)



▼新しい教材、例えば、物語文の場合、教材の全文を読み通すという活動が一般的である。その場合、教師が音読(範読)、デジタル教科書の活用、あるいは、全員で音読する等様々な方法がある。ここで、話題にして

いるのは学習計画第一である。多くの場合「教材名(○○○)」を読み、感想を書く。」と記述している部分。▼授業における学習活動は「全体を読んで思ったこと・考えたことをもとに感想を書く」その感想をもとに学習計画をたてるになっている。日頃は、それほど気にならなかつた学習活動。しかし、「個別最適な学び」ということがこれからの教育の主流になろうとしている時、これでもいいのかという思いがする。▼それは、「指導の個別化」と「学習の個性化」観点で整理されていることと「子どもが、自己調整しながら学習を進めていくことができるようにと指導する」ことの重要性が指摘されていることの大事さを理解したからである。更に、「『Yes』教科書が読めない子どもたち」(新井紀子)を読んだ時、授業改善の大切さを感じたからである。▼教材文の全体を読む・感想を書く・課題や学習計画を立てる学習計画には間違いはない。しかし、「しっかりと指導をしています」の言葉の奥に、大事なことを見落とされているのではないかと思つたからである。(吉永幸司)

他教科での「書く活動」
川部 長人

国語科で学んだ「書くこと」が、他の教科でどのように生かされているのか考えてみた。体育科では6月中旬から水泳の学習が始まった。授業中にふりかえりの時間をとるのが難しかったので、子どもたちは日記で水泳の学習について書いてきた。

みなさんは水泳が得意ですか。得意な人が泳ぐ姿を見ると、息づきをいつしたかと思うほど自然な小さな動きでしています。ところが水泳が苦手な人にとって、息づきは難しいものです。そんな人たちのために息づきのコツを紹介します。息づきには三つのポイントがあります。

一つ目は口の出し方です。息を吸うには口が水面から出ていなければできません。あなたはどのようにしていますか。あごを上げて前に顔を上げていませんか。そうするとかなり首がつかれます。また、その姿勢の時、水をかくうでの動きが止まってしまいます。息づきのたびに進む勢いが弱ってしまうのです。正しい口の出し方は、あごを引いて、顔を横に向けるだけです。それでじゆうぶん、口は水面から出ます。向きは右でも左でも、あなたのやりやすい方で構いません。

くために、肘から水面の上に出ます。それと同時に、出した腕と同じ側に顔を横に向けて、息づきをするのです。そして指先から腕がまた水に入るときに、顔も水中にまどします。

三つ目に息のはき方とすい方です。息は顔が水中にある間に、少しずつ鼻と口からはき出していきます。そして苦しくなる少し前に水面から顔を出します。その時に、残っていた息を一気にはき出して、すばやく息をすいこみます。

文で読むと難しそうに思えますが、人間の体は息をはけば、吸えるようになっているので大丈夫。息をはくときは、息を吸い込むいきおいをつけるために、口まわりの水をふきとばすくらいいきおいではきましよう。泳ぎながら練習するのが難しければ、はじめはプールの中で足をついたまま練習するといいですよ。その時に、自分左右どちらで息継ぎをしやすいか見つけましよう。(Aさん)

Aさんはスイミングスクールに通う、水泳が得意で大好きな子。苦手な人にも水泳を好きになってほしいという思いから、呼吸のポイントを説明文で学んだ読み手に伝わりやすい書き方を意識して書いてきた。学級通信でAさんの日記を紹介すると、次の水泳の学習でAさんにアドバイスをもらいに行き子がたくさんいた。普段の生活でも、国語科の学びを生かして

つてほしい。(東近江市立能登川南小学校)

「力を伸ばす個別評定」
川端 大介

一学期が終わろうとしている中、国語授業について振り返って見た。すると、真っ先に思い浮かんできた事として『個別評定』が挙がってきた。国語科では、音読を大切に取り組んできた。四月には、本を両手で持つことや、本を立てて読むこと等、学習の構えも大切に指導した。指導したことが子どもたちにとって為になっているのかを時々確認しながら行った結果、全員が本の持ち方や立てて読むことは大切だと思ふとのことであった。

一学期最後の物語文教材として扱ったのは「おむすびころりん」であった。場面ごとの「おむすびころりんすつとんとん。ころころころりんすつとんとん。」の読み方を挿絵などから想像し読む活動を行った。おむすびが穴に転がるように教室を転がりながら読む児童や、片足でケンケンしながら転がる様子を表す児童もいた。様々な読み方を工夫する姿を見て、私も自身も楽しみながら学習を行っていた。

全五時間で単元を組んで指導する中で、三時間目あたりで子どもたちの学習に向かう勢いが停滞しているように感じた。きつと、音読の工夫をし尽くして飽きを感じてきたのだろう。何か手立てを講じないといけないと思ひ、本を読みながら試行錯誤した。そこで、お話の中に四回出てくる「おむすびころりんすつとんとん。ころころころりんすつとんとん

ん。」の読み方を考えることにした。二回目の読みが挿絵を基にして読み方の違いが大きかったからである。子どもたちには「四回出てくる中で、一番読み方が分かれたのは何回目ですか。」と発問したところ、約八割の児童が二回目と答えた。そこで、挿絵を基にして「〇〇な気持ちで読む。」ことを確認した。「ふしぎな気持ち」や「おどろいた気持ち」、「がっかりした気持ち」等、読み方をイメージするための手がかりを与えて読んでいった。

全員が、自分の読み方を決めたところで「これから二回目を全員で読みます。三点満点で点数をつけます。」と伝えた。子どもたちからは歓声が上がリ、自信いっぱいの子であった。「二点で十分工夫できています。一点はもうすこし工夫が必要ですからね。」と伝え、全員を二点以上にすることたため行うことに決めた。

まず、一人で三分間の練習を行った。全員が自分の世界に入り込んだように読んでいく。バラバラに練習する子どもたちがどこか一つにグツとまとまっているように感じた。

その後は、一人ずつが全員の前で発表をした。言うまでも無く全員が三点であった。点数をつけることには賛否あることは承知の上で、私もとても緊張した。子どもたちが「今の自分は何ができていて、どこを直すともっと良くなるのか。」を肯定的に感じられる個別評定を今後も取り入れていきたいと思う。(守山市立 立入が丘小学校)

「国語力のつけかた」
川端 由起

2年生を担任して約5か月が経ちました。「ふきのとう」「たんぼのちえ」今までの経験を活かし、楽しく円滑に授業が進められました。しかし、「スイミー」で、レオレオ二さんの他の絵本の感想を書こうという学習を最後に行った時に壁にぶつかりました。

レオレオ二さんの他の本の内容が小学2年生には難し過ぎたようで、半数の児童が感想文が書けないのです。すなわち、誰が何をし、どんな出来事が起こり、どんな気持ちになったのか読み取れないのです。仕方なく、私が本を読み、本の説明を詳しく行いました。そうすることで、やっと本の内容が理解できたようです。

「スイミー」の前に、この本読もうという学習で、本のPOPを作成、他の学年からも好評を得ていたので、本を読むのが好きな子どもたちだ、本のPOPも2年生なのに書ける。よって、レオレオ

二さんの本の感想文もすぐに書けるだろうと高を括っていました。

しかし、レオレオ二さんの他の本は大人が読んでも面白い物が多いのですが、スイミーみたいにして承転結の本は少なく、そこが2年生には難しかったように思います。ある児童が、「先生、この本の話がわかるには、もっとたくさん本を読まないといけないと思う」と真剣な顔で言ってくれたことに衝撃を覚えました。昨年度は5年生で、国語以外に教えることが多く、物語作品や説明文の読み方を学ぶだけで精一杯でした。

教材で学んだことを生かして、並行本を読んだり、あるジャンルについて詳しく調べて書くということが中々出来ませんでした。しかし、教科書作品の読み方だけの学習では、読む力、書く力はつかない。更に国語力を高めるには、作品で学んだ文の読む方法を使って、別の物で試してみる。この学習方法が必要だと改めて感じました。

単元のゴールをイメージして、児童にやる気を出させ、国語力がつく学習方法を常に考えていきます。

(草津市立志津小学校)

音読での感情の表し方
桑原 孟夢

4月に谷川俊太郎さんの「ときん」を学習した。音読が中心だったが、その中での子どもたちの成長を紹介していきたい。

自分はこの学習を通して音読で感情を表現できるようになって欲しいと考えた。このコロナ禍でマスクをし、表情が見えない中でどのように感情を表し、伝えていくのか考えてもらいたいと思い、めあてを設定した。はじめに子どもたちに「ときん」を音読させた。最初は教科書をただ読んでいるだけであつたが、その中に一人、首をかしげながら音読する子どもがいた。

その子どもになぜ頻繁に首をかしげながら音読しているのか聞くと、詩の中の「かなあ」ところを本当に自分が悩んでいる・考えているように読みたくて声の抑揚だけでなくジェスチャーも加えたというのだ。相手に感情、気持ちを伝える上での大切な要素をこの子どもは身に付けていたのだ。他の子どもたちにもこの授業が終わる頃にはこういった姿になって欲しいと考えた。

次に子どもたちには抑揚をつけて読んでみたらどうかと提案した。すると、子どもたちは見違えるように読み方が変化していった。ただ読んでいたというところから語りかけるような読み方に変

わっていた。抑揚をつけるだけでなく、こんなにも読み方が変わるのか、音読が上手になったと驚き喜ぶ子どもたちの姿があつた。

子どもたちはもつと上手に音読するため、感情を表現するためにどのような言葉をすればよいのか考えたいと言つたのであつた。いろいろな要素を意見として出し合つた。ひとつ目は読むスピード、ふたつ目は目線、みつつ目はイメージする、よつつ目はジェスチャーだつた。

学習を進めていくうえでこういった要素・意見を音読に加えていくことにした。まず、抑揚に加えてスピードを意識して読むように指導した。すると、「かなあ」の前を一旦止めて読んでいる子どもがいた。話を聞くと、例えば「かなあ」の前にさわつてみようという文があり、その文を「さわつてみよう！」と意気込んだけれど、やっぱり悩んでしまったというのを表したかつたと言ふのだ。スピードを意識するようにと言つただけで、その一歩二歩も先を考えて読んでいた。イメージすることも自然と行つていたのであつた。そして最後のジェスチャーを加えた。

すると、首をかしげたり、ゆらゆらしてみたりと各々がジェスチャーをして書いてあることを伝えようとしていたのであつた。

この学習を通して感情は簡単に伝わりやすいということを学んでくれればと願うばかりである。

(京都女子大学附属小学校)

感情や経験と
結び付けて読む
(詩の学習から)
海東 貴利

詩『あかちゃん 東君平』を教材に選び、詩を読んで、内容を説明したり、考えたことを伝え合ったりする学習を三年生に行った。

●授業の実際(導入の活動・登場人物の行動から登場人物の境遇や状況を把握する場面)：題名と作者名を板書し、続けて次のように板書した。(数字は行を表す)

①あかちゃんが()
②おかあさんはうれしくてわらいました。
③あかちゃんの()
④おかあさんはうれしくてわらいました。
⑤あかちゃんに()
⑥おかあさんはうれしくてわらいました。

最初の発問は、「おかあさんはどうしてうれしくて笑ったのでしょうか」。児童からは、「あかちゃんに続く()が、()の、()といった助詞やおかあさんの行動を頼りに想像したことを次々と発表した。「あかちゃんが笑いました。あかちゃんが言葉をしゃべりました。あかちゃんの弟ができました。あかちゃんがお母さんと呼びました。あかちゃんがお昼寝してくれました。あかちゃんの名前を呼びました。あかちゃんに服を着せました。あかちゃんがうまれた。あかちゃんが大きな声で泣きました。あかちゃんが病院

から家にやってきました。あかちゃんのご飯を食べました。」。この時点で実際の本文は伝えなかつたが、「一人一人の発言に対して」「それも有り」だなという周りの雰囲気の中、教材文に集中することができた。

(かっこ)の言葉を確かめるにあたって、次の⑦⑧⑨を先に板書した。

⑦あかちゃんはどんだん ⑧おさくになりました。
⑨おかあさんはうれしくてわらいました。

さらに、ヒントとして、⑤行目の(かっこ)の中の言葉(歯がはえました)を最初に板書し、①行目と③行目の(かっこ)の中の言葉を考えてみることにした。児童がどれかなと思案する時間が流れる中、「①行目に『あかちゃんのご飯を食べました』がくるのは違うのでは？」とつぶやいた児童に、「どうして」と聞いてみた。児童は「(⑦)行目を指さして)どんだんおさくになったとあるから、(①)行目は)歯がはえる前にご飯を食べるのは順番が違うと思つたからです。」さらに、「(どんだんということは)あかちゃんが大きくなつていく順でないといけないのでは？」と発言した。そのことをきっかけに、あかちゃんに続く助詞と成長の順に着目して本文の詩の言葉を吟味する学習が続いた。

●授業の実際(展開の活動・本文の最後の一文⑬はどう書かれていたのか考えさせる学習の場面)

⑩あかちゃんはあかちゃんだと
⑪おもっているうちに
⑫ようちえんに行くようになり
ました。
⑬おかあさんは()

同じ文章を読んでも着目する部分や、どのような感情、経験と結び付けて読むかによって一人一人の違いが出る。併せてほかの人の感じ方などのよきにも気付くことが大事である。そこで、一人一人の考えを聴写し、自分の考えと比較できるように、座席表枠に書き込めるワークシートを準備した。一人ずつ発言を聞き、書き取る学習は今ではアナログに見えるかもしれないが、様々な考えの相違を聞き比べる活動としては効果大だった。

一人一人の発表を順番に聞いてみると、周りから「なるほど」と声があがった。：「②④⑥⑨行目に繰り返し表現方法が使われているので、最後の一文も『うれしくてわらいました。』になると思っています。」「いつのまにか大きくなって『成長して感動しました。』にしました。」「見送りの時に手を振ってバイバイしているようすを想像して『おかあさんはうれしくて手をふりました。』にしました。」「いつもそばで見えていたのに幼稚園に行っている間は会えないから、『さみしくてなきました。』と想像しました。」など。実際の本文「おかあさんはうれしくてなきました。」を板書すると、これも児童から「なるほど」と納得の声。

(高島市立安曇小学校)

編集後記

▲六月例会
(第四八三回)
は、新型コロナ

ナ感染防止対策をしての研究会となりました。

▼初めにいくつかの意見交換をしました。①延期・中止が続く全国国語実践研究会開催について②第4回近江の子ども俳句教室の開催中止について③11月19日(土)「近江の国語実践研究会(彦根)、テーマ「私のめざす新しい国語学習」の具体的な役割等について。いずれも感染状況を考慮しての判断となります。

▼次いで、「くじらぐも」(二年)を教材としての読むことの実践について川端大介(守山・立入が丘小)さんから授業への思いをお聞きし研究協議をしました。

授業構想は、以下の4つ。

①音読で読む楽しさ実感させる
②動作化で想像を膨らませる
③思考を深める発問の工夫
④「一」を活用して音読の成長が実感できるようにしたい

協議では、入門期からの一年間の指導の見直しを持つことや、家庭任せの音読活動の改善と音読の学習の充実の大切さ、「一」を活用した学びの記録と再生の意味づけ等の意見を交流しました。子ども達の学びの姿を子どもに寄り添って評価・意味づけし次の学習につなげる形成的な働きに留意して、読むことの学習の力と態度を育てたいものです。

▼巻頭には中村武史様より、貴重な言葉をいただきました。深謝いたします。(森 邦博)